

極低出生体重児の育児支援（早期介入）の実際

分担研究者 : 前川 喜平¹⁾
 研究協力者 : 副田 敦裕²⁾
 共同研究者 : 濱田美代子³⁾, 大畑ひとみ³⁾, 須崎由美子³⁾, 座光寺佳代³⁾, 横田益美³⁾,
 阿部佳子³⁾, 石倉夕佳³⁾, 小櫃芳江⁴⁾, 青木ゆう子⁵⁾, 伊藤育代⁶⁾, 桜井教子⁶⁾

要約：極低出生体重児は、児自体が持つ身体的ハイリスク因子に加えて、児を取り巻く環境要因にも多くのハイリスク因子を持つ。この環境要因を整えることが児の健全な育成を促すのに重要な課題になると考えられる。今回は極低出生体重児を対象とした育児サークルを創設し、育児支援活動をおこなった。育児サークルは、同様の育児経験を持つ家族同士の交流を促し、育児経験の共有化が図られ、育児不安の解消に役立っていた。育児サークルは、育児環境の調整に役立ち、健全育成に有用であると考えられた。また会報の発行は、サークルへの参加者はもちろんであるが、サークルに直接参加できない家族にとっても、同様に会報を通して育児経験の共有化が図られ、育児環境の調整に役立つものと考えられた。

見出し語：極低出生体重児，育児サークル，早期介入，育児支援

【研究目的】

極低出生体重児を持った両親は、出生時から母親としてあるいは父親として、児の誕生の喜びを充分に感受することもなく、出生直後から死への恐怖、将来への不安、自責感など児に対して Negative な印象を強く持ち、正常児を持った両親とは異なった特異な経験をする事が多くみられる。この特異な経験は、児を取り巻く育児環境にも影響を与えており、また極低出生体重児にみられる異なった発達過程との相互作用にて、育児環境をより複雑なものとし、育児の混乱をさらに助長していると考えられる。このため、これらの育児環境を調整することは、より健全な児の育成を促すのに有用な事と考えられる。

今回は、極低出生体重児を取り巻く育児環境を調整し、児の健全な育成を支援することを目的に、早期介入の試みとして極低出生体重児を対象とした育児サークルを作り活動し、その有用性を検討し、さらに運営方法などにつき考察した。

1. 「すくすくクラブ」の活動について

【対象および方法】

対象は平成4年以降に出生した極低出生体重児とその家族とした。特に年齢制限は設けず、縦のつながりに主眼をおいたサークルとした。家族や医療スタッフを含めた自主サークルとしての運営を試みている。原則として年4回の開催とし、開催時間は13:30~15:00とした。院内の講堂などを使用し、自由遊びの後、保母による親子遊び(手遊び、ペープサート、エプロンシアター、パネルシアター、紙芝居、シーツ遊び、親子体操など)、看護婦によるゲーム(魚釣りゲーム、たし算ゲームなど)、看護婦や母親の進行による懇談会などをおこなった。戸外でも1回実施しピクニックをおこなった。また会報(年4回発行予定)や会員名簿を作成し会員の交流に努めた。

現在までに6回開催し、会報は4回発行した。会員としての参加家族は、現在35家族39名(双胎4組)で、0歳~5歳の対象児が参加している。現在は主に2~3歳の児が主体となっているが、1歳未満の参加者も15%前後みられている。

第2回目の開催後、会への感想など自由記述によるアンケート調査をおこなった。

アンケートから得られた結果や運営上の問題点などについて報告する。

【結果】

極低出生体重児を持った56家族にアンケート用紙を配布し、29家族より回答を得た。回答を得た家族のうち、サークルへの参加経験者は15名であった。

まず、「すくすくクラブ」といったサークルに何を期待するかといった質問には、未熟児を育てる上での不安を話し合ったり、先輩ママの体験談を聞きたい、成長した子供たちを見たいなど、お母さん方との交流ができればとの記入が6名、先輩ママの話が聞きたい; 5名、他児の成長を見たい; 4名、悩みや不安の解消; 4名、他児と遊ばせたい; 1名、病院スタッフに会いたい・話を聞きたい; 2名であった。またこれらの期待が、実際に参加して達成できたかとの質問には、すべて出来たが1名、一部出来たが13名、全く出来なかったが1名であった。

サークルへ参加して家族同士の交流が出来たかとの質問に対しては、交流が出来たとしたものが12名、出来なかった; 2名、どちらともいえない; 1名であった。参加しての感想として、皆さん頑張っているのがわかり、元気になって帰れた。発育面(少食、言葉など)であまり焦らなくなった。家でも出来る遊びがあり参考になった。保母さんとの遊びで、子供が思ったより反応していたのを見て、家でも遊んであげる機会が増えた。顔見知りになった人たちと、健診などの時にも話が出来ようになった。などといった意見が聞かれていた。

またこのようなサークルの必要性については、必要; 26名、どちらでもよい; 2名、必要でない; 0名、形式を変えて必要; 1名であった。

運営方法や運営上の問題点に関しては、懇談会は初対面の人とは話しにくかった。ある程度のテーマが設定されていた方が話しやすく興味が持てた。テーマによっては年齢的にあわない話題もみられたが、経験者からの話が聞けた。医療スタッフが主導で進行されると予防接種など医療面での話題がで参考になったが、もう少しフランクに日常生活での

1) 東京慈恵会医科大学小児科 2) 都立母子保健院小児科 3) 都立母子保健院看護科
 4) 聖徳大学短大 5) 至誠ナース愛児センター 6) 至誠会第一保育園

話題ができるよかつたなど意見が出されていた。また保母との親子遊びでも年齢的な差、発達の個人差、発達障害の有無などで発達年齢の違いがみられ遊びの設定の工夫を希望されていた。また発達の違いを他児と比較する傾向もみられ、障害が残ってしまったので取り残された感じがした。といった感想も聞かれた。

会報については、楽しみにしていると言った意見が多く聞かれ、会報を増やしてほしいなど、特にサークルに参加できない家族からは要望が強くみられていた。

【考察】 極低出生体重児を対象に、縦のつながりに主眼をおき、母親同士の交流を目的とした育児支援サークルを設けて運営を試みた。

年4回の開催は、自主グループとして運営していくには適切な回数と思われた。皆で時々集まりたいと言った要望には応えられていたが、初対面の家族同士にはやや継続性が持ちにくく思われた。

「すくすくクラブ」は、年齢制限を設けなかったため、各年齢層からの参加が得られ、先輩家族との交流を持つことで経験談を聞いたり、成長した児と接することなどで育児に安心感を持つなど、育児環境の調整に有用であった。

運営上は、参加者が各年齢層にわたるため遊びや懇談の内容に工夫が必要であった。保母をリーダーとした遊びからの導入は、会の雰囲気や和やかなものにし、3歳前後の児を主たる対象とした親子遊びをすることで、年齢に合わせた親の関わり方により、親子ともに楽しく参加でき、児の反応を確かめられていた。懇談会はテーマ別に話すことで、各年齢層の参加を容易にし、経験談を話し、聞くことで交流が活発になっていた。またピクニックなど戸外での活動は、各年齢層の参加を容易にし家族間の交流が自然におこなわれていた。

また参加年齢層を広げることで、先輩ママの経験談が聞きたいといった要望は達成され、育児不安を解消し、育児環境の調整に非常に役立っていたが、各発達段階の児が参加され、合併症や障害に対し、年齢の浅い児を持つ家族では他児との比較をし、不安を助長している場面もみられ配慮が必要と考えられた。

また会報は楽しみにする家族が多く、会員間の連帯感が持たれ、意義のあるものになっていた。

2. 「H a i H a i クラブ」の活動について

【対象および方法】

対象は修正月齢5か月頃から1才6か月～2歳頃（歩行確立まで）の極低出生体重児とその家族とした。歩行確立までの比較的早期の同年齢の児の集まりとし、育児に不慣れで育児不安の比較的高い時期での育児支援を試みた。

原則として毎月1回の開催とし、開催時間は10:30～12:00とした。院内の講堂を使用し、自由遊びの後、保母による親子遊び（挨拶、あいさつ遊び、手遊び、ペープサート、エプロンシアター、パネルシアター、シート遊び、親子体操など）おもちゃの制作、看護婦をリーダーとした懇談（離乳食、予防接種、日常生活での話題など）などをおこなっ

た。毎回連絡ノートを使用し最近の様子、心配事、会への参加後の感想などを記載してもらった。

【結果および考察】

現在、参加家族は22家族26名（双胎4組）である。現在までに10回実施し、参加家族数は徐々に増加している。しかし母親、父親、兄弟の参加も含めると多人数になるため、場所の設定、遊びや懇談の取り組み方にもよるが、1サークル10家族程度までが適当な人数と思われた。同年齢のサークルとしたため、育児上の共通の話題が持ちやすく、さらに同時期に入院していた家族がいるため、サークルへの参加を容易にし、育児仲間といった一体感を持ちやすくしていた。比較的近い年齢の児との接触は、育児面での具体的な経験談を聞く機会が得られ、お互いにアドバイスし合う場面がみられた。しかし反面、現在の発達状況を他児と比較する面も見受けられていた。

午前中の開催は、開始時間に遅れ気味の家族がみられたが、昼寝時間などとの兼ね合いで、生活リズムの面からは支障を来さないように思われた。しかし遠方の家族の方は参加を見合わせる場合もみられた。月1回の開催は、負担になる様子はなく継続性を持つのに適切と考えられた。

会の進行に関しては、はじめの自由遊びの時間は、会への導入をスムーズにするのに有用であった。兄弟の参加は、児の導入を容易にし、会全体の流れをむしろスムーズにしていた。保母による親子遊びは、雰囲気や和やかなものにし、両親の参加を容易にしていた。またあいさつ遊びなどで両親に一言話してもらうことで両親の会への導入を容易にしていた。親子遊びは、毎回同じ遊びを取り入れた方が会の流れをスムーズにし、児や両親の参加を容易にしていた。また遊びを覚えてもらうことにより、帰宅後に同様の遊びを取り入れることを可能にしていた。会の途中でおもちゃの制作をしおみやげとしたが両親の積極的な参加がみられた。またおもちゃの制作をきっかけとして、日常生活の話題がでることが多くみられ、家族間の交流にもより積極性がみられていた。

【結語】

極低出生体重児を取り巻く育児環境には特異なものがみられ、家族を含めた育児環境を調整することが、健全な児の育成に役立つと考えられる。極低出生体重児を対象とした育児サークルは、共通の育児経験を持つ家族の集まりとして育児不安の解消などに役立ち、育児環境の調整に有用であった。

縦のつながりに主眼をおいた「すくすくクラブ」では、先輩母親の経験談を積極的に聞く様子が見られるようになり、予防接種や食事、公園での遊びの工夫などから、最近では就学などの話題もみられ、縦のつながりを主眼としたサークルの有用性が認められていた。

また歩行確立前の児を対象とした「H a i H a i クラブ」は、同年齢の家族の集まりとして家族同士の交流が積極的に認められ、退院後早期の育児不安の解消に有効であった。育児に自信や安心感がもたれ余裕がみられるようになっていた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:極低出生体重児は,児自体が持つ身体的ハイリスク因子に加えて,児を取り巻く環境要因にも多くのハイリスク因子を持つ.この環境要因を整えることが児の健全な育成を促すのに重要な課題になると考えられる.今回は極低出生体重児を対象とした育児サークルを創設し,育児支援活動をおこなった.育児サークルは,同様の育児経験を持つ家族同士の交流を促し,育児経験の共有化が図られ,育児不安の解消に役立っていた.育児サークルは,育児環境の調整に役立ち,健全育成に有用であると考えられた.また会報の発行は,サークルへの参加者はもちろんであるが,サークルに直接参加できない家族にとっても,同様に会報を通して育児経験の共有化が図られ,育児環境の調整に役立つものと考えられた.